かお・人・interview

2023年8月22日

所長インタビュー

国土交通省　九州地方整備局
遠賀川河川事務所　所長

牟田弘幸氏

MUTA Hiroyuki

九州には20本の国管理河川があり
その中で遠賀川は8番目に位置する中規模河川。
石炭産業の影響と流域内の人口密度の高さから
かつては深刻だった水質汚濁も住民や
協力団体の地道な活動により大幅に改善し
放流した稚魚が河口堰で目撃されるほどに回復。
遠賀川河川事務所の牟田所長は、
全国で取り組む「流域治水」は官民一体となって
推進する事業だ。だからこそ、遠賀川を愛する
住民との連携は欠かせないと語る。

Q所長就任にあたっての抱負

近年、気候変動の影響か異常気象が頻発しています。遠賀川流域でも、平成15年7月豪雨、平成29年九州北部豪雨、平成30年7月豪雨、令和2年7月豪雨といった洪水による大きな被害が出ました。全国的に「流域治水」の取り組みを進めていますが、遠賀川についても、水災害の激化に対応した流域治水に向けて本格的に始動していきたいと考えています。

遠賀川河川事務所屋上より遠賀川下流を望む（直方市）

▲平成30年7月豪雨の出水状況

これまでの流域治水プロジェクトは、主には、行政サイドでの検討と取り組みになっていますが、今後は、流域住民の方にも流域治水の理解を深め、さまざまな行動に移していただくため、住民目線での流域治水プロジェクトの策定が必要だと考えています。そのため、日頃から川で活動されている河川協力団体や住民団体の方にも検討段階から行政と一緒になって、流域治水プロジェクトに参加いただき、住民にとって理解しやすく、親しみやすいプロジェクトを目指したいと考えています。

遠賀川流域では、80を超える住民団体が活動しており、その数からみても遠賀川に対して関心を抱いているのがわかります。これからの流域治水の大きな力になっていただきたいと考えています。関係するさまざまな方と連携を図りながら、遠賀川らしい流域治水の実現に向けて取り組んで参ります。

自治体の結束力が高い遠賀川らしく住民も一緒になった流域治水プロジェクトにしたい。

Q九州や福岡県とのかかわり

平成28年に熊本河川国道の調査第一課長の際に、熊本地震が発生し、現地で災害対応を行いました。益城町での被災状況、阿蘇大橋の崩落、緑川での堤防の被災状況を目の当たりにして、自分の無力さを強く感じたことを鮮明に覚えています。そのような状況で、たくさんの方々からアドバイスや支援を受け、なんとか現場での対応ができたことは、今でも大きな力になっています。

また、次の年の平成29年には、筑後川河川事務所の調査課長に赴任しました。その際に、九州北部豪雨が発生し、朝倉市の赤谷川や日田市などで大規模な被害が発生しました。私は朝倉市の出身です。身内や友人が朝倉市や日田市にはいます。当時、防災室のレーダーに映った線状降水帯を見ながら、早く通り過ぎることを祈っていました。再び、大規模な災害対応を求められました。被災後すぐに地元に入り、地域住民の方から、お話を伺いました。その際、住民の方々の将来への不安を強く感じました。この時も、非常に多くの方々から支援を受けながら対応することができました。

これまで、災害対応を行い、地域の方の気持ちや不安を直接伺いました。多発する自然災害で辛い思いをする方が一人でも少なくなるように取り組んでいきたいと思います。

Q事務所の紹介

遠賀川は、下流域には北九州市や中間市、中流域には直方市や宮若市、上流域には飯塚市や嘉麻市、彦山川には田川市と、下流から上流まで市街地が形成されており、流域市町村は21を数えます。

そのため、遠賀川の流域面積は九州の国管理20河川中8番目、幹川流路延長は11番目と、中規模の河川ですが、流域内人口は約62万人と九州で2番目に多く、流域内の人口密度は九州で1位となっています。河川管理施設の数が約900施設と、九州の国管理河川の3割を占めるなど突出しています。本川堤防の約8割が兼用道路であり、維持管理が難しい河川となっているのも遠賀川の特徴です。そのため、樋門・樋管のフラップゲート化や統廃合の推進、維持管理がしやすい堤防断面の整備などの取り組みを進めています。

Q 今年度の事業概要について

平成30年7月の出水に対応するため、遠賀川本川では河道掘削を進めています。下流部の流下能力向上のネックとなっていた中間堰の改築が完了したため、下流から河道掘削を進めています。併せて、直方市、小竹町など中流部および芦屋町の堤防整備を進め、流域内のバランスを見つつ整備を進めています。

支川彦山川では、流化能力向上対策として、河道掘削を進めるとともに番田橋の架け替えや引堤事業に着手しております。今後は、田川市とも連携し、流加能力向上対策だけではなく、利活用しやすい川になるようにしていきたいと考えています。また、平成30年7月豪雨で甚大な内水被害が発生した飯塚市の庄司川については、国、県、飯塚市で連携した対応を行っています。国では、遠賀川

フラップゲートへの改良（無重力化）

（整備前）

（整備後）

本川の水位を下げるための河道掘削と庄司川排水機場の増設工事を実施しています。

Q 地域との連携・協働について

▲住民団体による河川活動

かつて遠賀川は洗炭によって黒く濁り、水質も悪い状態でしたが、現在は地域の方々の活動によって美しい景観を取り戻しつつあります。次世代に自然豊かで美しい遠賀川を残すため、80以上の住民団体が遠賀川流域で活動しています。これらの住民団体を連携するため、5つの出張所ごとに交流会を開催しており、その中でも「直方川づくり交流会」は、27年間も続いています。試行錯誤を繰り返しながら、続けていると思いますが、このような活動は川への関心が低いと続かない。私たち河川管理者は、こうした活動を円滑に進めるために、しっかりと支援していきたいと考えています。

直方の水辺は、キャンプや環境学習など多くの市民が利用している水辺空間です。遠賀川が地域の活性化を図るため、一つの起爆剤になる「かわまちづくり」の取り組みも行っていきたいと考えています。現在、中間市や田川市で「かわまちづくり事業」を進めていますが、遠賀川が将来にわたって地域に活用できるような仕組みづくりを地域と一緒に考え、実施していきたいと思います。

また、飯塚市街地には、災害対応で整備をした吉雄橋や中の島などもあります。このような場所で遠賀川を活用した地域活性化の取り組みも、重点的に行いたいと考えています。コロナ禍により、河川利用も控えられていましたが、5類になったことで社会が順応に向かっています。河川利用も徐々に増えてきました。このような状況だからこそ、遠賀川の魅力を発見してもらういい機会だとも思っています。このタイミングを活用して新しい使い方や新たなアイデアを創造させ、地域が元気になる取り組みを進めて行きたいと思っています。

Q 地域建設業への要望・メッセージ

遠賀川の河川整備を着実に進め、膨大な数の河川管理施設の適切な維持管理はもとより、災害時の対応にあたっては、流域内を熟知されている地元の建設業界の存在は非常に重要です。大規模な災害から学んだことは、自衛隊などの支援も大切ですが、発災後に最も早く復旧に取り組んでいるのは地元の建設業界ということです。これらの復旧作業は、早期の安全と安心を確保するために24時間体制で行われます。流域について豊富な知識を持っている業界の方々は、地域にとって宝だと思います。

これからも地元建設業界の皆さまの意見を聞きながら、建設業界、地域の発展のために尽力したいと考えています。これも私にとって重要な仕事の一環です。

▲稼働掘削作業

Q 趣味や健康法について

川や海、山に行くのが趣味です。自然の美しさに触れると心が豊になり、新たなエネルギーが得られます。遠賀川流域には、福知山や英彦山等があるので、ぜひ訪れてみたいと思います。現在は単身赴任中で、直方に滞在する機会も多いと思いますので、遠賀川流域をできるだけ多く巡るつもりです。

プロフィール

出身地：福岡県朝倉市
生年月日：昭和47年11月10日（50歳）
H 7年4月　国土交通省入省
H24年4月　水管理・国土保全局　河川環境課
　　河川保全企画室　河川管理係長
H26年4月　熊本河川国道事務所　調査第一課長
H29年4月　筑後川河川事務所 調査課長
H31年 4月　九州地方整備局 河川計画課 課長補佐
R 3年 7月　水管理・国土保全局 治水課 課長補佐
R 5年 4月　現職